
ペナルティ4

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペナルティ4

【Zマーク】

Z0894B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

ペナルティ第四弾。熱斗たちの未来は、ペナルティに託された・・・

“第248話 薄氣（第248話 はき）”

ペナルティはなにか楽しくなかつた。なぜだらうか。毎日の生活に追われ、学校に行つたあとは、勉強尽くし。世の中は、何も変わっていない。まるで、今までのペナルティたちの苦労を水の泡のようににしてしまつた季。しかし、その季も、最近では見かけなくなつていた。

ペナルティには、笑いが不足していた。いや、笑いなどといつものは、そこら辺でテレビをつければやつている。

しかし、それを見ても、もうペナルティは笑えなかつた。なぜだ。少なくとも、熱斗といたときのほうが凄く楽しかつた。

もう一度、熱斗に会いたかつた。しかし、もうそんなことはできない。

これからは、自分で歩んでいかなければならないのだ。

しかし、やはり、生活は楽しくない。このままだと、木偶の坊になりそうだ。

そんなとき、ある人物がペナルティのところに向かつっていた。その男も、この世の中から、笑いが消えたと思つた。

しかし、男はペナルティにある提案を持ってきたのだ。

それは、忘れかけていたことだつた。なぜそんなことを忘れたのか、自分にはさつぱりだつた。

男は、言つた。

「あなたはある真実をまだ知らない。」

その男の言葉を聴いた瞬間、ペナルティは思い出した。李だつた。ペナルティは現実の生活の流れに、李との記憶まで流されていたのだ。それも当然だらう。現実では勉強ばかりを要求される。ペナルティは古いことなど覚えてられるはずがない。

久しぶりに李に会ったペナルティだつたが、李からあることを告げられることになる。

李は、ペナルティにこう言った。

「熱斗たちの未来が消えた。このままでは、人々の永遠の発展ができないなくなる。」

それを聞いてペナルティはすべてを思い出した。新神が熱斗たちを排除しようとしていたことを。

それに気づいたときには、李は消えていた。

『第249話 生活との戦』

しかし、ペナルティにはやらなければならないことが山ほどあった。しかも、ペナルティは不安だつた。熱斗が倒されるほど敵と戦えるかと。しかし、これは熱斗がどうやって倒されたか知らないからである。

そして、次の日。ペナルティは普通に学校に登校した。しかし、学校はいつものように荒れていた。

ペナルティが途中から通い始めてからこうだつた。しかし、ペナルティは今まで通つた。

授業はぜんぜん進まなかつた。まるで幼稚園のような状態だつた。ペナルティが自分の席に着くと、誰かが後ろからやつてきた。ペナルティは、その人を見たとき、驚いた。

それはクラスで一番の問題児。川瀬だつた。

「よう。ペナルティ」

川瀬はこう言つた。

ペナルティはいやな予感がした。川瀬の仲間は、皆、川瀬にお金を巻き上げられたらしい。それを川瀬が何に使つてているのかは分からぬが、多分、ろくでもないことに使つてているのだろう。

そんなことをおもつていると、川瀬は言つた。

「ペナルティさ、お金貸してくれねー。」

やはりそうだった。ついに川瀬はペナルティまで触手を伸ばした。

「うーん・・・」

ペナルティは考え込んだ。「」で断れば、その後どうなるかペナルティには想像ができた。だからといって、貸してしまえば、多分、それは戻つてこない。みんなこいつやつてお金を奪われたと聞いていたからだ。

ペナルティは考え込んでいるだけだった。チャイムが鳴つているのに川瀬は、そこを立ち退かなかつた。

「早くしろよ。」

だんだんと川瀬が怒り始めていた。

そしてついに川瀬は他のところに行つてしまつた。そして、この瞬間から、川瀬のペナルティいじめが始まるのであつた。

その次の日、ペナルティが朝、学校に来ると、机がとんでもないことになつていた。

『第250話 いじめ』

ペナルティの机は落書きされ、さりこみ、脚がほとんど曲がつて使えない状況だつた。

すぐに職員室に駆け込み、担任の吉本先生に言つたが、かえつて来た言葉はとんでもない言葉だつた。

「お前さ、なんか反感買つことやつたんじゃないかな？」

それにペナルティはうなずいた。

「そうか、やつぱりな。確かにあいつらも悪いが、お前も悪い。だいたいお前はやさしそうぎるんだよ。反抗しないと。」

この言葉にペナルティは、ある一種の憤りを感じた。

そして家に帰ると、部屋をめちゃくちゃにした。

ペナルティの母親はその音に驚いた。ペナルティの母が二階に上がると部屋はだらしがない状態になつていた。

そして、ペナルティの姿が消えていた。

ペナルティは、近くの団地の公園に来ていた。相变らず、小学生はカードゲームに熱中している。ペナルティはそんな中、一人暗い思いになっていた。

“なぜ、先生はたすけてくれないんだろうか。もしも梅園先生だったら・・・”

ペナルティは梅園先生がつかんだ。そういうえば、熱斗たちの世界は消えてしまった。しかし、ペナルティにはあの空間が一番だった。居心地が良かつた。

いつの間にか、日が暮れていた。公園の電灯に明かりがつき、小学生はいつの間にか消えていた。

そこに一人の男が近寄ってきた。ペナルティが身構えた。その男は李だつた。その姿を確認するとペナルティはほつとした。李はこう言った。

「ペナルティ。熱斗たちを助けないか。今からでも遅くはない。ペナルティもやつと氣が張つてきたようだ。」

李の言葉にペナルティは心の中が突き動かされた。
「はい。なんだか、熱斗たちとすごしていったほうが楽しい。」

ペナルティはそう言つた。それと共に、涙が一筋垂れた。

「どうか。つらかつただろう。」

李はペナルティをやさしく抱えた。

〃第251話 新神との再選へ〃

ペナルティと李は、新神と戦うためにひそかに熱斗たちの世界へ旅立つた。

そこは、廃墟が乱立していた。とても人が居そうな雰囲気ではなかつた。

その頃、新神もペナルティたちの動きを察知していた。しかし、新神は余裕だつた。いまさら、元に戻すことなどできないと。

新神は、ちょうど、大プロジェクトが終わり一息つけた。そして、

ペナルティたちを迎えるためにペナルティたちを探し出しに旅立つた。

さて、ペナルティは田の前の光景にまだ啞然としていた。

そして、日が暮れようとしていた。

ペナルティたちはそこを動けなかつた。夜、空を不気味なぐらい星が覆つていた。

李はテントを張り、あらかじめ用意していた品々をあけた。ペナルティが驚いた原因は、もしかするとこの巨大なリュックサックだつたのかもしれない。

次の日、ペナルティが目覚めると、李は外で誰かと話していた。ペナルティが外へ出るとそこには、新神がいた。

「やあ、挑戦者よ。私は受け入れる。人間は挑戦をしない。しかし、もしも人間が挑戦することが出来れば、こうにはならなつただろう。」

「いや違う！」

ペナルティは反論した。

「少しば成成長したみたいだな。ペナルティ。」

新神ははき捨てるように言つた。

そして、新神は言つた。

「さて、でははじめましょう。ペナルティにペナルティを課すつもりはない。ナビと自由にクロスフュージョンするがよい。」

「しかし、ここでは出来ないので。」

ペナルティは言った。

「では、なぜ他のところでは熱斗がクロスフュージョン出来たのだろうか。それは、このカードを仕込んでいたのだ。」

新神はある一枚のカードを見せた。それは少年たちが持つていうようながみ（ペーパー）で出来たものだつた。

「これは紙だが、熱斗たちのP.E.T.にはあるものが仕組まれていたんだ。」

新神の言葉にペナルティは驚いた。

「光正を知っているか。」

ペナルティは熱斗のおじいさんが疑人格プログラム、つまり、ネットナビを作ったということを熱斗から聞いた事があった。

「その光正プログラムはいくつあるんだ。そのひとつは、熱斗のPETの中に隠されていた。それが、このカードと同じ働きをするものだ。」

ペナルティは種明かしに感心した。

「さて、やろうか。」

新神はあるカードリーダーに通した。

「これでハンディーはなくなつたな。」

新神はそう言った。

「ペナルティ、クロスフュージョンしろ。」

李は命令口調で言った。そしてペナルティはクロスフュージョンした。

しかし、いつもとは違っていた。ペナルティのシンクロ率はあまりよくない。だから、まるでもう一人を背負つているような状態なのである。しかし、今は違つた。凄く体が軽かつた。

「どうやら準備は整つたようだな。」

新神はそういうとカードを出した。

どうやら、そのカードをカードリーダーに通すと、戦えると言つむのらしい。どこのアニメでやつっていたのとおんなじだ。

新神は、いろいろな攻撃カードを仕込んできた。しかし、結局のところ、ネットバトルとそんなに変わつたものではない。ペナルティも、何回かだけネットバトル？をやつたので、多少ついていける。しかし、能力に差があつた。

「どうやら、ついていけないらしいな。」

新神は言つた。そして、新神はある作戦を実行しようとしていた。

新神はあのアニメのきめ合説的な発言をした。そして、新神はカードを裏返すと、そこに登場したのは、哲史だった。

しかし、今までとは違う雰囲気がした。

「さあ、やつてしまいなさい。」

いつの間にか、新神の持っているカードリーダーが、本に進化？していった。

さて、ペナルティはどうなってしまうのであるつか。

＝第253話　過去を捨てて・・・＝

ペナルティは、哲史に困った。自分には攻撃できなかつた。しかし、哲史は新たに習得した技を使つてくる。とても不公平だつた。

「どうだ。もう哲史は昔の哲史ではない。今、裏の力、ウラケンを手に入れた哲史にかなう相手はない。」

新神は微笑んだ。まるで悪魔だつた。

ペナルティはこのままでいいのだろうかと思った。今まで、こんなことをやられてばっかだつた。もしかすると、自分は弱いのかもしれない。

そういう感情がペナルティを包んでいた。しかし、ペナルティは我を忘れてはいなかつた。

なにかいい方法は。

ペナルティの心の中はもう葛藤だらけだつた。

しかし、ペナルティは決めた。

それは哲史を攻撃することだつた。

そして、ペナルティは作戦を実行した。

今度は、ペナルティが有利になつた。

これに、新神は困つてしまつた。しかし、時はすぎていくだけだつた。

ついに哲史は勝負に負けてしまった。

新神の作戦負けだった。新神は、信じられなさそうな顔をした。

ペナルティは言つた。

「たとえ、友達でも、時には厳しく、時にはほやほやすることのが大事なんです。」

新神は、それを聞いて言つた。

「わたしの負けだ。この世界を元に戻そう。」

そして、新神はあるチップを持ってきた。

「これは、私が保存しておいた人間たちのデータだ。これをP E Tに挿入すれば、データによつて元に戻る。そして、これが解毒剤だ。」

「ペナルティは早速、P E Tにチップを挿入した。そして、地球を光が包んだ。

熱斗は気がついた。

そこにはペナルティがいた。

「俺は・・・。」

熱斗は言つた。

ペナルティは皆が戻つてくれたことにうれしかつた。

そして、ペナルティたちに新たな課題が課せられた・・・。

|| 第254話 伝説が加速する!! ||

熱斗たちはだんだんと新神と戦つていたことを思い出していた。そして、同時にペナルティが活躍したこと・・・。

ペナルティは貴船長官に呼ばれた。

「君の活躍を私も初めて知つた。どうもありがとう。」

それにペナルティは照れた。

「さて、是非、首相が表彰したいと言つているのだが出席してくれるかね。」

そのことばにペナルティはうなずいた。

そして、次の日、ペナルティは首相のところへ行つた。

「ありがとう。ペナルティ君。そして、すまないことをした。」

首相は会つなりこう言つた。

そして、首相は続けた。

「今まで、過去から來た人間はしようがないやつしかいないと思つていた。しかし、それは私の勘違いだつた。」

「そうたよ。」

熱斗が言つた。どこから入つてきたのか分からぬが、そこに熱斗がいた。熱斗はこういった。

「前に、バール隊佐という人が来て、共に戦つてくれたことがあるんだ。そして、ペナルティがまた、他の時空から現れた。こんなにみんながんばつてくれていてるのに、なぜ時空法を作つたのか。俺には理解できない。」

首相は、時空法をなくすと宣言してくれた。そして、ついに元の世界に戻ることとなつた。

ペナルティは祐一郎に聞いた。

「また、来てもいいですか。」

それに祐一郎はうなずいた。

ペナルティの心のなかの闇雲がすつきりとしていた。

ペナルティは元の世界に戻つた。自分の部屋はぐちゃぐちゃだつた。そしてペナルティはその部屋を直すと、勉強を始めた。高校受験は確実に迫つていた。ペナルティは、一生懸命に勉強をした。

その姿に、ペナルティの母も安心した。

次の日、ペナルティは学校へ行つた。もう学校に行きたくなかったという気持ちになかつた。旅立つ前はそんな思いが自分を包んでいた。しかし、あの世界で気分転換できた。

もう何があつても怖くはなかつた。ペナルティには相談相手が出来た。向こうの世界にいる熱斗が・・・。

(後書き)

今までありがとうございました。ペナルティ5（多分、これで終わりだとも思います。）があります。どうぞご覧になってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0894b/>

ペナルティ4

2010年10月11日05時38分発行